

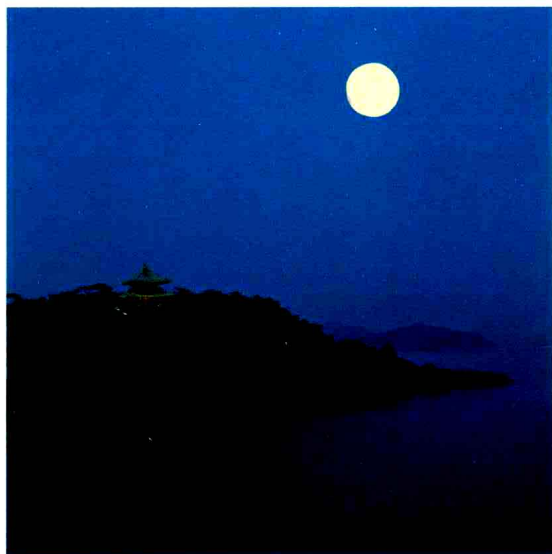
万葉の歌

10

人と風土

中西進企画

下田忠著



中国・四国

保育社

人と風土

中西進企画

福山市立女子短期大学教授 下田忠著

万葉の歌

10

中国・四国

保育社

万葉の歌一人と風土― ⑩中国・四国

昭和61年 2月20日 印刷 定価 1,400円
昭和61年 2月28日 発行

著 者 下 田 忠
発 行 者 今 井 龍 雄
発 行 所 株式会社 保 育 社

〒540 大阪市東区上町 1-17-13

電話 06-762-1731 (代)

振替口座 大阪 6-12346

〒170 東京都豊島区南大塚 1-1-2

印刷 / セブン印刷株式会社

用紙 / 日本加工製紙株式会社

王子製紙株式会社

© 1986 下田 忠

落丁本・乱丁本はお取り
替えます

ISBN4-586-70010-6 C0392 ¥1400E

PRINTED IN JAPAN (NDC 910.8)

心のふるさと

人麻呂にとって石見の海は、かけがえのない愛すべき大自然であつた。澄みきつた海底になびく玉藻が彼の恋ごころをかきたてた。彼の胸のときめきが聞こえてくるよううだ。

憶良にとって伯耆大山の雄姿はどのように見えたのだろう。その裾野で泥にまみれて働く農民たちに、彼は思いを馳せたのではなかったか。

家持にとって因幡の雪は、人知れぬ寂しさを宿していたろう。額田王は、瀬戸内の海にきらめく月に向かつて情感をたかぶらせた。彼女の口吟は、夜空に長く尾をひいて消えていったことだろう。

旅人は、鏡のように穏やかな瀬戸内海で、亡き妻をしのび清らかな涙を流した。赤人は、伊予のいで湯をたたえ、久遠の時の流れに心をゆさぶられた。新羅へ遣わされ

た使人たちは、真夏の瀬戸内を、あえぎながら西航した。彼らの心はいつも家郷に向かうのであった。

大空を行く雲に、清澄な水の流れに、あるいは海山の姿に、万葉びとは心うたれ、それがその時どきのみずからの心のうちと呼応した。風土が彼らの歌をはぐくんだ。雲の行くごとく、水の流れるごとく、自然にほとぼしり出た歌に、その人間模様がうつし出される。わたしはこれらの歌を読むとき、そこはかとな懐かしさを覚える。それは、自分の遠い祖先と語るようでもあり、今の自分の内部にたち返るようでもある。人間の「生きる」ことの源にいざなわれるとも言おうか。

万葉の世界は、人間の心のふるさとである。

逝きし母に捧ぐ

昭和六十一年一月



江ノ川の朝(島根県)

ただに逢^あはば

逢^あひかつましじ

石^い川^{かは}に

雲立ち渡れ

見^みつつ俤^{しの}はむ

柿本人麻呂

(卷二二三五)



石見^{いはみ}の海

角^{つの}の浦廻^{うらみ}を

浦なしと

人こそ見らめ

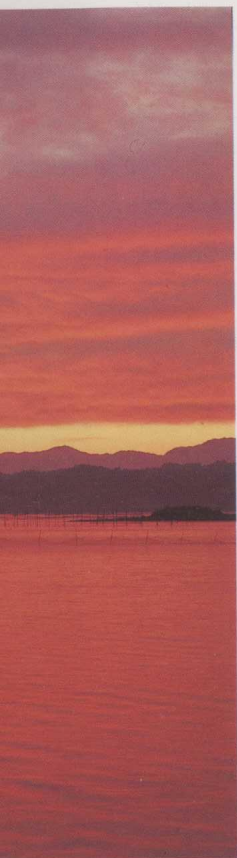
潟^{かた}なしと

人こそ見らめ……

柿本人麻呂（巻二―三二）

石見の海（島根県）





おほなむち
大汝

すくなびこな
少彦名の

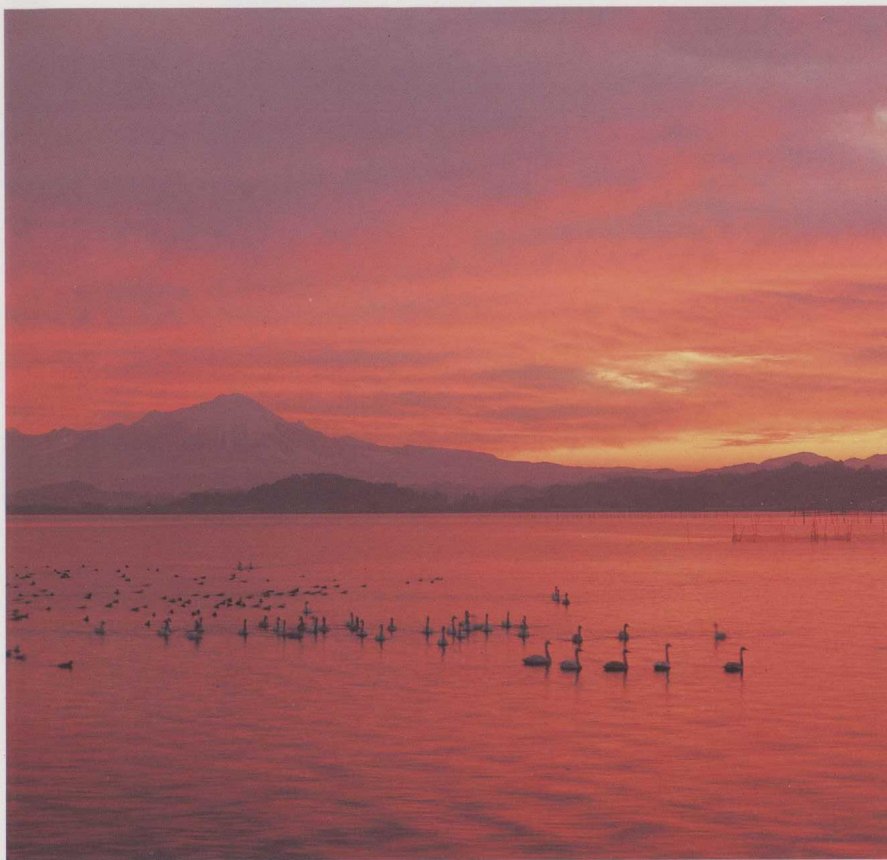
いましけむ

しつ
志都の岩屋は

いくよへ
幾代経ぬらむ

おひのすぐりまひと
生石村主真人（巻三―三五五）

静の窟（島根県）



中ノ海の夜明け-大山を望む-(島根県)

飫^お宇^うの海の
 河^{かは}原^{はら}の千^ち鳥^{どり}
 汝^なが鳴^なけ^ば
 我^わが佐^さ保^ほ川^がの
 思^{おも}ほ^ひら^くに

門^か戸^と王^の
おほきみ

(巻三—三七二)

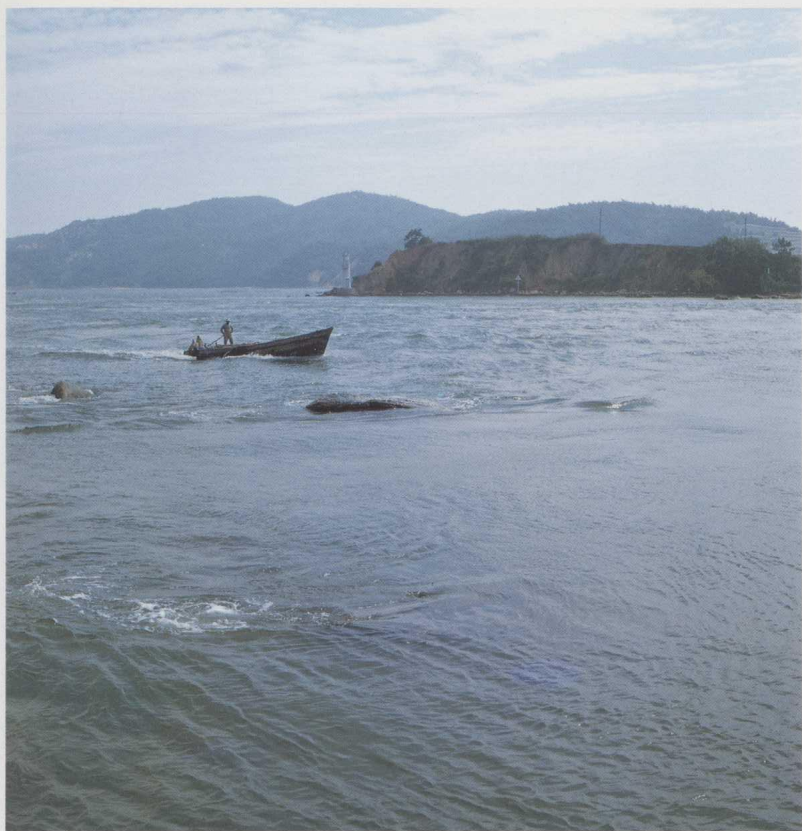
あたら
新しき 年の初めの 初春の 今日降る雪の いやしけ吉事よごと

大伴家持（卷二十四五一六）

因幡国庁址遠望（鳥取県）







牛窓の瀬戸(岡山県)

牛窓の
うしまど

波の潮さゐ

島とよみ

寄そりし君は
よ

逢はずかもあらむ
あ

(卷十一―二七三二)



鷺羽山より瀬戸内をへだてて讃岐富士を望む(岡山県)



円通寺の丘より見た玉島の港と源平大橋（岡山県）

鞆^{とも}の浦の 磯^{いそ}のむろの木 見むごとに
相見^{あいみ}し妹^{いも}は 忘れえぬやも

おほ^{おほ}とも^{とも}のたびと
大伴旅人（卷三―四四七）





ぬばたまの

夜は明^あけぬらし

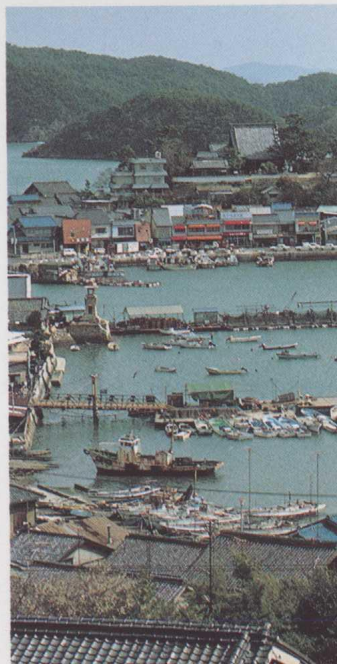
玉^{たま}の浦に

あさりする鶴^{たづ}

鳴き渡るなり

遣新羅使人^{しらきしじん}

(巻十五―三五九八)



鞆の浦(広島県)



倉橋島・桂浜より望む(広島県)

我が命を

長門の島の

小松原

幾代を経てか

神さび渡る

(卷十五―三六二)